

第86回麻布獣医学会 特別講演

近年、話題となった細菌性人獣共通感染症

加藤 行男

麻布大学獣医学部公衆衛生学第二研究室

本講演では、腸管出血性大腸菌感染症および動物の咬傷による感染症として話題となったカプノサイトファーガ感染症を中心にお話する予定である。

(1) 腸管出血性大腸菌感染症

4月に富山県を中心とした焼肉チェーン店で発生した腸管出血性大腸菌 O111 による食中毒（患者数 169 名，死者 4 名）が日本を騒がせている頃，ドイツにおいてスプラウト（新芽野菜）が原因食品と推定されている腸管出血性大腸菌 O104:H4 による大規模なアウトブレイク（患者数 4,137 名，死者 50 名）が発生し，腸管出血性大腸菌（EHEC）が相次いで脚光を浴びることとなった。

腸管出血性大腸菌は，ウシなどの反芻動物が重要な保菌動物として知られ，ブタやニワトリあるいはイヌやネコからも分離されている。腸管出血性大腸菌は，1977年に Konowalchuk らにより Vero 細胞に対する細胞毒（ベロ毒素，VT）を産生する大腸菌として報告され，1982年にアメリカで発生したハンバーガーが原因食で，出血性下痢症を主徴とした食中毒事件の原因菌として注目され，その後，多くの国で流行を繰り返している。

今回，ドイツで発生した腸管出血性大腸菌 O104:H4 は，腸管出血性大腸菌と言うよりも，腸管凝集付着性大腸菌（EA_ggEC，EAEC）にベロ毒素を

産生する能力が備わり，毒性が強まった大腸菌であると報告され，EHEC と EAEC のハイブリッドとして，ベロ毒素産生性腸管凝集付着性大腸菌などと呼称している報告もある。

(2) 動物の咬傷による感染症

イヌなどの動物の口腔内には，*Pasteurella*，*Staphylococcus*，*Porphyromonas* など様々な病原体が常在している。ヒトは，これらの菌を保有している動物に咬まれる等によって感染する。

カプノサイトファーガ感染症は，1976年にアメリカで最初に報告され，イヌやネコの口腔内に常在する *Capnocytophaga canimorsus* あるいは *C. cynodegmi* による感染症である。主にイヌあるいはネコ咬まれたり，ネコに引っかかれたりした場合に感染する。日本国内におけるカプノサイトファーガ感染症は，これまでに 20 名の患者が報告され，そのうち 6 名が死亡し，死亡率が 30 % と非常に高いのが本症の特徴である。患者の年齢は，20 歳代から 90 歳代と幅があるものの，40 歳代以上に多い。患者は免疫機能を低下させる基礎疾患がある場合が多いが，基礎疾患がない患者もいる。国内死亡事例 6 名の年齢は，59 歳以上と高齢であり，高齢が最も重要なリスクとなっている。